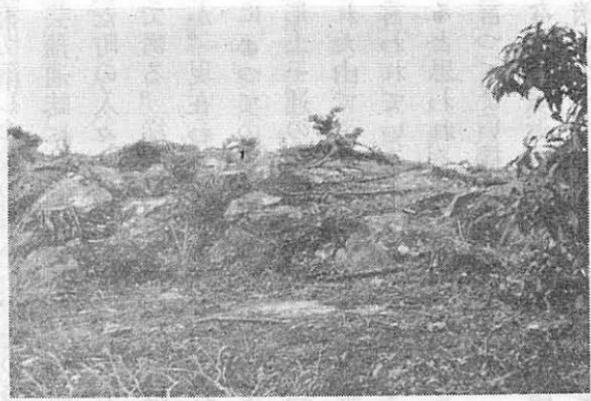


二、城趾への夢

芸藩通志に「嵩山、熊野村にあり、菅田豊後所居、山麓にまた城濠の地あり、出丸にてもあらんか、里人堀が城とよぶ」また「土岐城、同村にあり、此城山の麓に、別に四貫分とよぶ地あり、土岐の外城なるべし」と出ている。この嵩山は現在町の人は城山と呼んでおり、頂上には数十の大石が横たわり、城趾への夢を結びたい恰好の山であり、町の人はこの山に城のあつたことを信じているが、それよりもこの山麓の部落の人は、もつと出丸の方に心をひかれていた。城之堀区に落矢^{おちや}というところがあるが、城山と土岐城との戦に土岐城側の矢が落ちたから、この名があるという。そして土岐軍は城山側の備えが固いので東方にあたる初神方面から攻略の軍を進めたとか、または土岐軍が城山の中腹にある「いけだの禿^{はげ}」



夢の登岐城趾

登岐城山頂のこの平坦な台地は遠方からもその形相を望見することができる。われわれの夢はいつもこの城趾を終始点として老も若きも昔の夢を追うのである。

まで来たが、遂に刀折れ矢尽きたとか、これらの山にまつわる伝説に町の人は胸をときめかすのである。だが残念なことには城山と土岐城との戦いについては、今まで何の資料も発見していない。たゞ関録や毛利譜録によつて、今から四百三十年前の大永七年（一五二七）に熊野要害が切落されたことは確かであると云える。それならばこの場合の熊野要害は果して城山か、

土岐城かということが先ず才一の問題であるが、誰も今早急にこれを決めることは困難であろう。事実われわれには百年も前の事件は伝説的なものになろうとしている。この芸藩通志は文政年間に編集されたもので

あり、文化十二年（一八一五）に村からその資料を提出しているが、それよりも三百年も前のことであるから、当時の人達にも、もはや城趾は昔物語になつていたことは間違いない。たゞ、一つの推定を許されるならば城山と土岐城の戦いは熊野要害切落しの際の戦いか、その後天文年間の城山落城の際の戦いを根拠とした伝説であるということである。芸藩通誌には嵩山は菅田豊後の居とあり、判然と土岐城と区別しているようであるが、この城主の究明がまた町の人々に与えられた課題であろう。だがこゝにも障害はある。それは賀茂郡の槌山城と土岐城との関係である。槌山城の城主は菅田越中守であるが、嵩山を菅田豊後とすれば、土岐城には誰がおつたのであろうか。現在われ／＼が知ることのできる熊野の菅田氏は、この芸藩通誌と、熊野に残された僅かの資料（註）によつてのみである。ともかく、われ／＼の目からは、少くとも戦術上の立場からは、槌山城と土岐城は地形上一連の防備態勢にあると思われる。実に土岐城山は熊野に於ては標高こそ低いけれども古くから注目された山であつた。（註）現在誰が見ても城趾と思われるものは、嵩山の麓の堀の城（単に城（じょう）とも言われている）と土岐城である。堀の城は少しく小高い小山で、周囲は現在農地で原状は保存せられておると思われるが、南側は開拓せられている。頂上は平たくならされており周囲に土塁を築き、一見屋敷跡と言つてよい構えである。現在、農地から切り立つたような外観を呈しているが、石垣を利用した跡は見られない。最近（昭和初年）まで西南斜面に古井戸が残されていたが、現在はつぶれている。土岐城山の頂上は狭いが、西北側に展開せられる熊野平原をにらんで城塞は構えられている。搦手は絶壁でよじ登るのもむずかしい。そして東北の初神側に頂上から二百米ばかり下つたところに古井戸があり、現在も泉がこん／＼と湧き出している。

城趾は常にわれ／＼の夢をかきたてる。そして熊野に生れ、育つ者は「うさぎ追ひしかの山」ではないが城山や土岐城の下に夢を託してはゞたくのである。しかし、われ／＼の夢も一度は冷厳な歴史的事実の体系化に編成しなおされなくてはならない。たとえそれはわれ／＼の夢を壊すにしても、また反対に郷土の夢を

立証する上に於ても、この試みは避けることのできない要請である。そしてその方法は唯一つ、熊野をめぐる周囲の情勢を明らかにするより外に方法はないようである。

先に述べた熊野要害が切落されたのは大永七年（一五二七）であるが、永正（十七年まで）大永（七年まで）年間の芸南地方の情勢は、山口の大内氏と出雲を本拠とする尼子氏の対立時代であつた。これより先、大内氏の對抗勢力は讃岐、阿波を中心に内海地域東半に勢力を持つ細川氏であつたが、今や安芸の国を舞台として尼子氏と對抗しなければならなかつた。この頃の熊野附近の小領主には、先ず矢野村に野間氏がいた。元来、矢野は平安末期、江田島、波多見島等と共に本家を八条女院とする安摩庄と呼ばれる庄園の一部をなしており、「八条女院領としてはまた能美庄、開田庄（海田庄）田門庄（安佐郡福木村）等がある。」

領家は清盛の弟の平頼盛であつた。頼盛は治承三年（一一九七）十二月二十七日領家としての権利を嚴島神社に寄進し（註）次で翌年四月十五日に本家八条女院は本家としての権益も寄進している。（註）そして矢野には庄官としての惣公文（その下に惣追捕使、小公文がある。）に中原惟道という在野の武士がおり、矢野町史によればこの中原氏が矢野に居住していたと伝えられる矢野（屋能）氏ではないかという推定を下している。降つて南北朝時代に入り、矢野保木（発喜）城に拠つた熊谷蓮覚は後醍醐天皇方として、足利尊氏の檄によつてたつた安芸の国の守護である武田方の軍勢と建武二年（一三三五）十二月二十三日から二十七日までの四日間、激戦を展開して（註）敗退している。熊谷氏が承久三年（一二二一）三入庄（安佐郡可部町内、三入、大林を中心）に地頭として入つたのは熊谷直実の孫直国が承久の変で勲功をたてた恩賞としてであつた。熊谷氏が何故に保木城に拠つたかの論証は矢野町史に詳しい。次で矢野は野間氏の領地となる。野間氏は文安二年（一四四五）重能の時、足利義政から矢野の地を与えられて尾張の野間庄から矢野の保木城に入つてくるが、弘治元年（一五五五年）毛利氏に滅ぼされるまでの百十年間、芸南地方の一勢力として活躍するのである。野間氏の領国は、古く矢野郷の地（矢野、坂、大屋、平谷、川角、押込）と焼山、苗代、

吉浦、吳附近で、さらに安芸東西条の内の下見村、上戸村、勝屋や石見の津淵村上静間村等で、隣の阿曾沼氏や竹原小早川氏とは所領問題で争つてゐる。庄園は応仁の乱（一四六七—一四七七）後は全く姿を消し、各地の小大名によつて領内の支配は行われ、以後いわゆる弱肉強食の世相を展開した。野間氏の本城は保木城であるが、それらの領地には支城が設けられ押込の陣ヶ城、苗代の掃部山城、焼山の陣山、吳（和庄）の堀城、音戸の波多見城等がそれである。世能庄（中野、瀬野）は平安末期には小槻氏の所領であつたが、これも承久の変後上野国浅沼から阿曾沼氏が入つてくる。吉川氏（大朝庄）竹原小早川（都宇竹原庄）も同じ頃地頭として入つてきた。また同時に安芸の国の守護として武田氏も入国し銀山城（祇園）に居を占めた。瀬野には三ツ城や丸山城や鳥子城等がその押えとなつてゐる。熊野の東部は賀茂郡であるが、弘安元年（一二七八）出羽の国の平賀惟長は高屋保を領し（註6）同じく弘安年中、東高屋に御園城を築き、こゝに入世の間いたが、文龜三年（一五〇三）弘保は白山城を築いてこゝに移つた。また平賀隆保が天文二十年（一五五二）毛利元就に囲まれて自刃したと伝えられる頭崎城もやはり東高屋にある。平賀氏と同じく弘安年中伊豆の国天野庄から志和庄に移住したと伝えられる（註7）天野氏は東志和の米山城に拠つてゐた。これらの地域は当時安芸東西条と呼ばれその範圍は西条盆地から黒瀬川を下り呉市広町に達し、更に東の内海までも含めた地域であつた。東西条には右に挙げた諸氏の外当然沼田小早川氏の所領も多かつた。（註8）

先に述べたように永正、大永年間は大内と尼子の二大勢力が芸南の地に於て衝突してゐたが、室町時代以来、大内氏の勢力は西条盆地にまで及びており、鏡山城を構えて安芸の国の截定の拠点としてゐる。すなわち長祿三年（一四五九）頃の大内勢力はすでに東西条、日高島、吳島、蒲刈島、能美島をその版図としてゐるようである。（註9）一方尼子氏の南下勢力は強く、大永初年頃は安芸の守護武田氏は勿論天野、阿曾沼、毛利氏等は一時尼子方となり、大永三年（一五二三）六月には尼子経久は安芸の国に侵入し、毛利元就、吉川元経を先鋒として鏡山城を囲みこれを陥落させてゐる。この頃の大内方は矢野を本拠とする野間氏と竹原

小早川氏であり、野間氏は終始大内方でその態度をかえてゐないようである。それが結局野間氏を滅ぼした原因でもある。それはともあれ、こうした情勢下にあつて熊野は当然尼子方になつたものと思われる。その当時の熊野の土豪には野村兵衛や梶山新左衛門尉等の名が見えるが、近隣の土豪のように傑出した働きはしてゐないのではないかと思われる。熊野には天正末期（一五九二）から嚴島の社人や内侍が所領を持つてゐる關係から、矢野等といつしよに安摩庄に属してゐたという想定も一応成り立つかも知れないが、これを実証するだけの史料は今見つからない。まして野間氏が常に大内方であつたとすれば、少くとも大永頃は熊野は矢野とは違つた旗下にあつたと言わなければならぬ。たゞし、われらの現代的感觉をもつてすれば野間氏の領地である平谷、川角と熊野は地形上、多少の起伏はあつたとしても、一連の盆地帯と言つてよいところに一つの疑義がある。しかし、当時の聚落は現在のように中溝区に密集した形態をとつてゐなかつたことに注意しなければならぬ。また熊野が東西条の地に含められてゐたかということであるが、安芸東西条所々知行注文（註10）には僅か一例ではあるが熊野を含めてゐない。このことには後考を待ちたいが、少くとも熊野が周囲の情勢からより多く東西条に關係を持つてゐたことは想像に難くない。府中を中心とする国衙領には室町時代の始め頃まで田所（石井）氏が勢力を持つてゐたが、熊野との關係も僅かの資料によつて、その片鱗を察するだけである。（註11）熊野と武田氏との關係であるが、長祿元年（一四五七）には沼田小早川氏は武田国信や毛利豊元等の力を藉りて大内勢と戦つてゐるから、武田氏としては極力大内氏の侵入を阻止するのに努力したわけであり、熊野の土豪も武田に従つたわけであるが、大内氏の勢力増大とともに野間氏は勿論、阿曾沼、竹原小早川、平賀等も大内方の傘下に入つてくるから熊野土豪もまた大勢に遡うことはできなかつたであろう。そして永正、大永に至つて尼子氏の南下とともに尼子の旗風になびくわけである。（註12）

大内義興は安芸において鏡山城も陥落し、その所領を奪われたので奪回を企図し大永四年（一五二四）五

月三万騎を以て岩国永興寺に陣取り、自ら一万騎を以て草津、仁保の兩城を降し、友田氏の桜尾城(廿日市)を囲み、嫡子の義隆は残る二万騎を以て武田氏の銀山城を囲んだ。翌五年四月五日義興の部将陶興房は矢野に上陸し、こゝを拠点として尼子方である天野氏の米山城(志波庄)を陥落させた。天野氏は毛利氏と盟約を固くして大内方につく。今まで尼子方であつた毛利氏もこの頃から大内氏への内付を決意しているようである。八月には陶興房は天野興定とともに尼子経久の軍と戦っているのを見ても、天野の態度は察せられる。翌六年七月大内方は尼子の属城である府中城を攻め、草津に戦い、翌七年二月いよいよ熊野城の攻界にかゝるのである。そして三月十八日には阿曾沼氏の鳥子城(瀬野)を陥落させている。熊野要害の攻撃の主軍は陶軍であろうが、これに天野氏や脇氏(安芸と周防の境の脇村在)石井氏(志和庄)等(註12)が加わる。



塔の五輪したむ苔

秘を夢の昔に、誰かわが墓の誰か、眠りに眠つて、思ひを大永、天文の昔に、かかるとる。

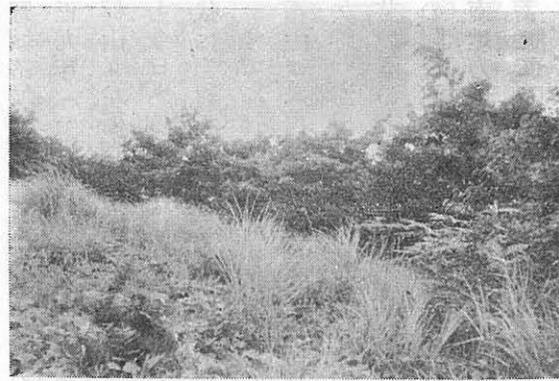
の熊野要害は土岐城であつて、土岐城から指呼の観にある魁城山も同時に陥落したものであろう。それならば、この時の土岐城主は果して誰であつたかということになるが、神宮部落の榊山神社の由緒には高根某の名が見えており、この宮を鎮守としたとあるが傍証はない。唯当然信じられるのは前記の野村や梶山であるが、これらの人は案外隣の瀬野等と關係を持つているかも知れない。実はこの推定は正しいかも知れないのであつて、熊

野城落城に続いて野村のこもる瀬野の鳥子城が落ちてゐるわけである。的場神社の御由緒調査書によれば天正九年(一五八一)梶山新左衛門、仏垣内休等は押込村より平谷村に来て開墾したとあり、神社の棟札にも梶山新左衛門の名が見えるが、これは土岐城の梶山の子孫なのであろう。その外土岐城主の子孫と称する家も今日あるようである。(註13) こうして土岐城や魁城山はわれ／＼の心のふるさとであるが、文化、文政時代に当村を訪れた人達には当時の詩情は湧かなかつたようである。それは趣向の相違でもあつた。(註14) すでに述べたように、毛利元就は大永五年頃から大内方になるが、尼子氏は天文九年(一五四〇)毛利氏の郡山城(吉田)を大挙して攻撃し、攻城意の如くならず翌年敗走する。この戦に大内方は救援の為陶隆房が矢野、海田に上陸し北上している。そして芸南の雄であつた尼子氏の味方武田氏も滅亡することになる。安芸の国の守護として入国した武田氏は終始大内氏の安芸侵入阻止に骨身を削り、変遷はあつたけれども瀬野の阿曾沼や熊野の土豪と關係の深い存在であつた。ともかく嘗て尼子、大内の二大勢力角逐の場であつた芸南地方は尼子氏のたそがれ時を迎えたわけである。そして毛利氏は武田の領地も合せて次第に強大な勢力を蓄えていった。

天文二十年(一五五一)大内義隆は陶晴賢(隆房改名)によつて弑されるが、此の事件は直接には大内氏滅亡を招来するが、安芸の国一帯には大きな変革が行われることになる。一口に言えば、毛利氏の中国制覇の発端となるわけである。これより先、鏡山城落城の後大内氏は大永末年再び西条盆地を奪回したが、この時一層要害な城槌山に本拠を移した。槌山城には芸備の押えとして菅田越中守、尾和備後守、大林和泉守、財満入道等千三、四百人の将士がいたが、陶の叛意により尼子晴久に通じたので陶は大内義長の命として毛利元就にこれを討たせた。この間の事情はいろ／＼あつたようであるが、元就は嫡子隆元や吉川、小早川、穴戸等の兵を以てこれを陥落させた。時に天文二十一年(一五五二)三月(註15)であつた。

先に述べたように熊野の嵩山は菅田豊後の居するところであつたが、この菅田豊後は関関録の飯田(菅田)

越中守関係のものや、飯田村（八本松町）や菅田村（黒瀬町）にその名が出てこないようである。事実、菅田越中守は当時この飯田、菅田を領していたのであるが、それだからと言って熊野の菅田豊後の存在を否定するわけにはいかない。現に熊野には菅田豊後の流れを汲む人もあるようであり、その関係を槌山城の越中守に求めている。したがって菅田豊後は菅田越中守宣真の一族で、その支配下にあり、嵩山に拠り、芸藩通志にいう堀の城に居を構えたものであると断ぜざるを得ない。だから大永年間熊野城（土岐城）落城の際の土豪とはその性格を今は一応区別したいと思う。そしてこの嵩山は年月は詳かにすることはできないが、槌山落城と軌を一にして陥落したものである。光教坊の縁起（註16）には単に天文の兵乱によつて大檀



城の堀

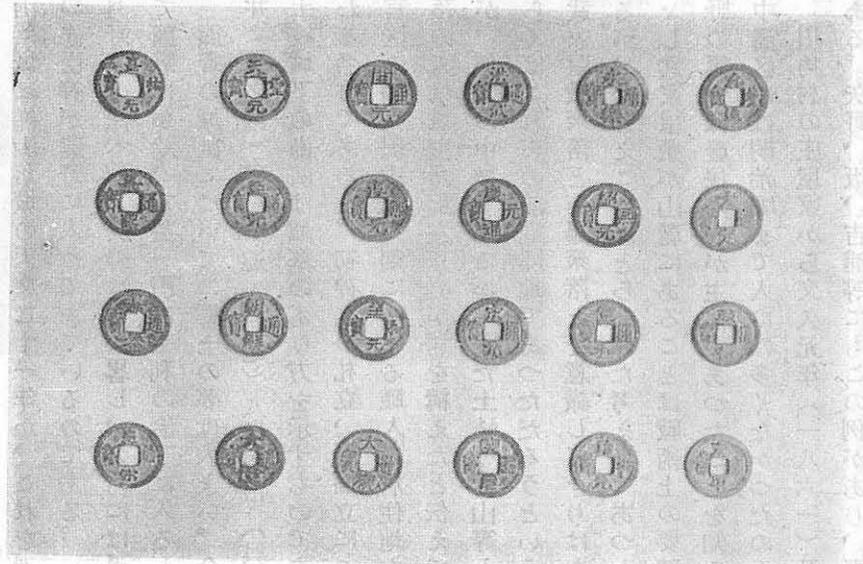
周囲は灌木にかまれているが、その根をつなくように土壘のあとが残っている。生い繁る夏草がつわもの面かげを偲ばせる。

那豊後守は滅ぼされ、菩提寺である石水寺（光教坊の前身）は焼失したとあるが、この間の消息を伝えていると思う。菅田豊後はこうして嵩山に拠っていたが、一方また土岐の要衝を開放したとは思えないのであり、その本拠はあくまでも嵩山であつたとしても、いくばくかの兵を配置してその備えを固くしていたものと思う。事実菩提寺である石水寺は石嶽山にあつた時もあり、この時の所在地を明確に規定することはできないが、ともかく山城を考へる場合、われわれの視点を嵩山だけに固定することは適當ではない。したがって先に述べた郷土の伝説である土岐城と城山との戦は、若しこれをとりあげるとすれば或は軽微な備えであつたろうが、毛利軍の進攻を阻む才一拠点としての土岐山が才一に陥落し、次で城山も攻略されたものである。こゝに土岐山を軽微な備うという結論に導かれるわけである。こゝに土岐山を軽微な備

えであると推論した理由は嵩山の存在と地形上、友軍である槌山により近いということからである。また嵩山落城は槌山落城の天文二十一年か、これを過ぎる数年後のことであろうと思われる。この頃すでに毛利氏の家臣等が熊野に入つてきているのである。（註17）そして毛利氏は天文二十四年（弘治元年、一五五五）四月野間の保木城（矢野）を攻畧し、九月には毛利氏の運命を決した厳島合戦に大勝しているのである。随つて熊野は勿論、安芸一円は毛利の治下に入るわけである。

熊野の城址についての郷土の夢は大きい。今、地名等によつてその跡を偲べば、土居ヶ原（平谷）上ノ土井（城之堀）風呂ヶ迫（呉地）八幡風呂（呉地）等は当時の武家聚落の所在を推察せしめるものであり、土岐城下の備前は城塞のあり方を示すものであろうし、また土岐周辺の馬場、院ノ平、瓶割等も古城にまつわる名称であろう。初神区の札立、湯面立についてはなお考えたいが、嵩山城下のかじやや海上山のある新宮区の鞘ノ垣内は刀剣に関する職人の居住地を示すものであろう。また呉地区に中城という地名があり、部落の人は城主丹羽左京亮が居を構えたと伝えている。風呂ヶ迫等の地名はこれらと関係があろうと思われるが、何故の中城であるか、また土岐や嵩山等との関係等、その全貌を明らかにすることはできないが、おそらくはこれらの前進陣地であつただろうという推定に止める外はない。そして戦国大名はその初期に於ては武家屋敷聚落と市場聚落とを意識してきりはなし、武士としての剛健素朴の精神の保持にとめたといわれるが、たとえこれがとらわれた考え方であつたとしても、熊野においてもそのことは大体言えると思う。たゞし武家屋敷が山麓にあることは戦術上の要請であるが、これに対する町屋といわれるべきものゝ性質は熊野の場合は農民階層が主体であつたことを知らねばならない。そして現在熊野町の人口集中部落と見られる中溝区には明治頃まで人口は多くなかつたのを見ても当時の聚落は想像がつくであろう。

川角村の庄屋家から文久元年（一八六一）及びその後にはわたつて中国の古銭が数千枚掘り出されたことがある。矢野、坂、吉浦等にもこの例があり、野間氏が内内氏の遣明船に従つて貿易をした名残であろうと矢



古 銭 (織田信氏藏)

藏家裏より発掘されたもの。上段より左→右

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 嘉祐元宝 | 天聖元宝 | 開元通宝 | 洪武通宝 | 永樂通宝 | 元豊通宝 |
| 嘉熙通宝 | 至道元宝 | 淳熙元宝 | 慶元通宝 | 紹熙元宝 | 大定通宝 |
| 嘉泰通宝 | 朝鮮通宝 | 至和元宝 | 宋元通宝 | 宣和通宝 | 政和通宝 |
| 皇宋通宝 | 大世通宝 | 大觀通宝 | 明門通宝 | 治平元宝 | 太平通宝 |

野町史は推定しているが、これらの古銭は当時日本の銭と同様に通用したのであり、庄屋家の由緒を明らかにしない限り結論は出せないが、同じように旧野間領から出土したことは興味多い。これもまた戦国時代の名残であろう。そして土岐城や嵩山城趾からは当時の面影を伝える土器の破片が現在も掘り出されるのである。

註1 光教坊藏

抑明芸州熊野村石嶽山光教坊之起縁者(中略)又謂石水寺是菅田豊後守之菩提寺也。然天文之兵亂于茲出来大檀那豊後守者為毛利大膳大夫大江元就被亡至于此時殿堂仏閣為兵火燒失而只仏像耳。此地也云々

註2 富田氏藏

一 安芸郡熊野村 トキカ城山
右此度遂見分候願以可相守事
文政十三寅年(一八三〇)閏三月

牧野久大夫
特野 広間

庄屋 仙兵衛
同 利兵衛

覚

安芸郡熊野村ときの城山

一、右火山ニ候条能覚居可申候何々異変有之火山入用之節者差図ニ可致候間平生其心得有之山上之様子并火煙之仕方等相心得差図有之候ハ、早速山上へ出張小屋掛等致し人数差置風夜相守らせ可申事
一、右山上ニ罷在候者賀茂郡吉川村槌山を風夜見詰罷在火煙見え候ハ、早速当山ニ火煙上ケ可申当山之火煙を受安芸郡奥海田村屋飛川山ニ火煙上ケ候条夫を見定メ候ハ、当山之火相止メ可申事

一、火煙之儀風ハ煙夜ハ火を第一ニ上ケ候仕方松葉肥松等を焼可申齋此余速ニ火煙上ケ候仕方相心得可罷在事

但霧深ク又雨天等之節火煙届かたく候ハ、早速急飛脚を以為念先方へ申通し間違無之様可致候尤火煙者別而強ク上ケ可申事

右之趣其方共へ申付置候間厚申合を堅ク相守可申速ニ相調候儀肝要ニ候条相違無之様可仕事勿論御内密御用ニ候得共親子兄弟たりとも申付候者之外一切申聞敷候自然他言仕候儀外分相聞候ハ、急度越度可申付事

文久元年酉(一八六一)三月
山下平八郎

熊野村先庄屋市郎左衛門

(傍点筆者)

註3 岐島文書 治承三。一。二。二七

註4 同 治承四。四。一五

註5 毛利家文書 一五二六号

註6 平賀文書

註7 川上村史年表

註8 平賀文書 二四三

安芸東西条所々知行注文
尼子(經久)殿江書立を進候て諸給人跡二百十六貫百五十之判形所持□也

一、寺町村此内式百貫吉之方自先年平賀(弘保)知行是者為平賀下南八百貫

兵部少輔抱申候又大内諸給人之跡今度対平賀御判形頂戴仕候寺町之内毛利先知行之外□方公領并寺社諸給人跡一□平賀可致知行之由今度御判頂戴仕候

一、御箇字三百貫宛 毛利知行

此れは三百貫にて候之由申候いか候□

一、東之村式百貫 阿曾沼知行

一、寺家村三百貫 諸給人知行 此内卅五貫者阿曾沼知行

一、三方三百貫 阿曾沼知行 大内家人 坂孫太郎 知行 何れも百貫宛抱
大内家人 土倉孫右衛門知行

(財)

一、飯田村百貫 才滿孫太良才滿右衛門知行

一、阿土村七十五貫 諸給人知行

一、志多見村百貫 野間吉浦彦太郎知行

一、上戸村百貫 同 吉浦知行

一、田口村七十貫 此内卅五貫阿曾沼知行

其外者大内方諸給人

一、三永村三百貫 此内百五拾貫福淨寺領

百五拾貫諸給人知行

一、三永方四十貫 小郡代領也

一、黒瀬三百貫 大内方諸給人

一、黒瀬乃美尾百貫 金藏寺領

一、仁賀田河尻七十五貫 多賀谷乃美 得益兩三人知行

一、広浦百廿五貫 一諸給人知行

一、久芳四百貫 平賀當知行

一、戸野郷四百貫 平賀知行

一、郡戸村二百卅貫 此内百八十貫平賀知行 此内又五十貫同名藤二郎

一、河内村七十五貫 平賀知行 此給も平賀知行此外五十貫多治比抱

一、三浦七十五貫 竹原知行

一、内海七十五貫 竹原知行

一、重安石 十二町防益公領

重安十二町者此外也

(中略) 又謂日本書紀

已上伍千七十伍貫數

一、能美島 七百貫

一、蒲刈島 七百貫

一、吳津 三百貫

一、倉橋島 三百貫 此四ヶ浦西条之外也

大永三年(一五三三)八月十日

註9 大内家壁書

註10 註8に同じ

註11 国衙領注進状(田所文書)

能野山御油田 小反小(諸社免四丁五反三百歩)

能野上分田三反大 公倭(諸社免五丁七反六十歩)

註12 天野右田毛利譜録

一、大永七年二月九日芸州阿南郡能野要害切落ス吃有戦功同日軍忠

状義興押判 大永七年二月九日芸州阿南郡能野要害切落時二ノ九與定郎從并從分捕手負人數注文

芸州阿南郡能野要害切落時二ノ九與定郎從并從分捕手負人數注文

分捕

頭一 野村兵郎兵衛 財滿源二郎討捕之

頭一 名字不知 財滿孫七郎討捕之

頭一 名字不知 三宅越前守疵足

頭一 三宅左衛門尉 足頸切疵 左右手切疵

頭一 能谷平太郎 疵右脇 石井藤次郎討捕之

頭一 梶山新左衛門尉 波賀孫左衛門尉討捕之

頭一 能谷修理之進捕之

頭一 秋山彦六討捕之

大内義興ノ判

脇三郎五郎殿

史学研究第八集第四六号(広島史学研究会)

石井氏記録について(戦国時代芸州志和庄内村に在住せし小土藁の

盛衰)石井規矩男

(横紙感状)

去九日能野要害落去之時被致疵之次第依遂注進被御感御感状候訖

可被抽忠節之由所被仰出之件如件

大永七年二月十三日 (陶隆房)

石井九郎三郎殿 尾張守在判

去九日能野要害落去之時致矢疵左脇之由陶尾張守注進状一見畢尤神

妙之至也彌可勵戰功之状如件

大永七年二月十三日 御書判

石井九郎三郎殿

同号(史学研究)によれば「元来石井氏は大内家の下知に従い志和

内村を中心に白市の平賀氏等と共に造賀要害を固めていたもの、如く

である。」

註13 萩原区にある墓碑文

古伝ニ曰ク抑横山家元祖ハ登岐城主ノ分族根古屋新左衛門重成ト称

ス云々

註14 広島蒙求(弘洲雜話)

聖山仁山詩、虎山評(第八)

秋晚同聖山遊遊能野村途上作四首 津田岳

崑角凌秋霜氣懸晨星錯落鶴過天西風驚星稻雲裡一 道青松到海田 岩鼻

此地別人又送入柳楊折盡屢傷神誰知佗日別離處鞋鞆秋風自由身 海田

早潮半落露興沙黃菊丹楓處々家漢々平田人似鳥秋晴爭摘木棉花 矢野

関閣録六十二

去九日能野要害落居之時分捕頭一各家到来之由陶尾張守注進状一見

訖感悦之至也彌可抽忠節之状如件

溪村生路失橫斜竹樹迷離如亂麻指点魁城山軀所一條粉塵是誰家 熊野

和元海韻二首 津村尙誼

過橋已覺野情懸蘂岸茶岡霜後天看得安南魚稻富三分是海四分局
路迴峰軀一溪斜來過魁場山下家愛此園庭無雜植松陰石蘚窠吾花

熊野宿歎濃氏宅 二首 岳

(興更)

紅塵堆裏苦匆忙兩日間遊日自長山深嵐翠常含雨地僅園林早得霜芳芳溢
蓋新菟美珠玉翻匙晚稻香燈下漫書途上句煙霞一簇滿奚囊

殘照沈林栖鳥啼殷勤留客主人情山中不甞塵埃氣村裏絕無更鼓聲雲宿窓
間燈火暗泉環枕畔夢魂清無端置我湘江曲斑竹蕭々壁上橫 壁間有宋人
畫竹故友

同前

尙誼

禾熟未收穫暫足爲農暇時欄橫牛臥穩確放水声遲晨氣溪山爽秋晴鳥雀嬉地
幽人亦撲事々愜襟期

又和元海韻 二首

往還兩日事雖忙留宿一宵來自長寒犬吠雲秋澗月啼禽翻葉曉林霜農談樵
唱人皆朴野歎山殺酒亦香外物無牽幽意足此生何必歎空囊

(林窓)

霜林初曙伯勞鳴起坐眼明時客情一敵薔花猶月色半宵山雨是泉声偶然載
筆閑遊好早晚休官逸韻清來往不迷他日夢檻前松嶺翠鬢橫

(註) 津村聖山名は尙誼字明甫通称正五郎

津田仁山名は岳字元海 (支) 通称篤平

聖山は文化文政の頃芸藩修誌(頼杏坪の芸藩通誌)纂校役、津
村聖山、津田仁山、坂井虎山の三山は親交があつた。

註15 関関録陰德太平記、飯田家譜

註16 註1に同じ

註17 関関録一

元就公御判

田二反 竹のはな

田一反 同 所

田一反小 同 所

田一反小 同 所

田二反 善福寺のおき

田二反 オカのうしろ

田一反 えの木の坪之内

以上 一町

天文廿一年卯月十一日

兒玉四郎兵衛尉殿

(註) 現在熊野の地名であるのは岡(初神区)であり、岡のうしろ
は検地帖にも出ておる。えの木は天正年間の御子内侍の打渡(敵島野
坂文書)に見え、竹のはなに類似の竹の下の語は城之堀区にある。善
福寺は不見。ただしこの項は後考をまちたい。

熊野之内御神田当納之事天文二十四年(一五五五) 礪山神社藏
毛利家の家臣の名が見える。

熊谷家文書一三二

毛利氏年寄連署知行打渡状

一、芸州西条之内上阿土五十貫并熊野之内五十貫文

一、芸州小方村之内百貫文之地

右以上合式百貫之地被進之置候可有御進止候仍打渡状如件

弘治二年(一五五六) 拾月廿八日

赤川左 京亮(花押)

粟屋右 京亮(花押)

国司右 京亮(花押)

熊谷殿代

細迫左京亮殿